

迷走★ハニーデイズ

1 夜空に瞬くこんぺいとう

夕暮れの空に、こんぺいとうのような星がひとつ、きらきらと輝いていた。

友人宅からの帰り道を、同級生の男子と並んで歩く。黙っているのが恥ずかしくなって、私——  
伊吹寧々いぶきねねは口をひらいた。

「さつき、録画の最後に出てきたコンサートホール……素敵だったよね」

「軽井沢かるいざわの？」

「そう。あんな素敵などころに行ってみたいな。私、学校の鑑賞会以外でオーケストラを聴きにしたことないんだ」

「へえ、そうなんだ」

「神谷かみやくんはあるの？」

「あるよ」

「いいなあ」

中学校の吹奏楽部の練習がない日、帰りに皆で部活仲間の家に寄った。吹奏楽とオーケストラの番組を複数録画している友人が、ちょっとした鑑賞会をひらいたのだ。

「もう少し大人になったら、あのコンサートホールへ一緒に行こうよ。僕が連れていくから」  
「ほんと!？」

「ああ、約束する」

優しく笑ったその表情に、私の胸が熱くなる。

「嬉しい。絶対に忘れないでね」

「忘れないよ。伊吹さんこそ忘れないでね」

「うん、忘れない……!」

もっと何か言いたいのに、彼の笑顔を見たらドキドキして言葉が出てこなくなってしまう。

だって、隣を歩いているのは、私がずっと片思いしている人だから。トランプペットが上手で、いつも落ち着いている、とても素敵な憧れの、初恋の人――

懐かしさとともに目が覚めた。

「……夢、かあ」

ごろりと寝返りを打ち、カレンダーを見る。今日は七月最初の金曜日だ。

何だか、いつもより朝日が眩しい気がした私は、慌てて枕元のスマホを手に取った。

「嘘ッ! アラーム気づかなかった! 遅刻しちゃう!」

どたばたと身支度を終えて、小さな仏壇の前に滑り込む。昨日職場でもらったお土産のクッキーを素早く仏壇に置いた。正座をして手を合わせる。

「お父さんお母さん、ごめん! 今日クッキーしかないや。行ってきます!」

遺影の中にいる両親に笑われた気がするけど、気にしない。

アパートのドアを開けて飛び出した私は、曇り空を見上げた。梅雨もそろそろ半ばすぎ。バッグの中の折り畳み傘を確認して、駅までの道を走り出す。

どうして今朝は、あのときの夢を見たのだろう。

夢の中で話していたのは、神谷くん。中学の吹奏楽部で一緒だった、同級生の男子だ。彼とは、あの約束のあと、すぐに会えなくなってしまった。

理由は、あの日の直後、中学三年の夏休み初日に、私の両親が事故で他界したからだ。

私には兄弟がない。祖父母も既に亡くなっていった。私は、ほぼ面識のない遠くの親戚に引き取られることになり、友人らと挨拶する間もなく、突然に中学校を去った。

親戚宅でいじめられはしなかったが、息苦しさを感じた。それで私は高校卒業後、寮のある職場に就職をし、親戚の家を出た。そしてお金を貯めて、二十歳のときに中学まで暮らしていた東京へ戻ってきたのだ。

こんなふうにごしてきた私の一番の思い出は、中学時代のこと。特に吹奏楽部の活動は、夢に現れた星のように今でも心の中で輝き続けている。

初恋の彼、神谷くんのことと同じかもしれない。私は男性と付き合い始めても、どうにもうまくいかなかった。いつまでも心の隅で初恋を燻らせて、ことあるごとに神谷くんの面影を追ってしまおうせいだらう。

こういうのを初恋コンプレックスとでもいうのかな。あれから十年以上経っても未だに夢に見るなんて笑ってしまう。重症もいところだ。

それはともかく、上京した私はまずは下町の工場の事務で働き、その後、中小企業の事務に転職した。

部活の影響で今でも音楽が好きな私は、働きながら音楽にかかわる仕事を探していた。そして二か月前、ついに楽譜や音楽雑貨を扱う店で働き始めることとなったのだ。

職場のある駅で電車を降りた私は、小走りで店に向かった。

どうやらぎりぎり間に合いそうだ。ホッと胸を撫でおろして、店舗の裏から事務所に入る。

「伊吹さん、これ最後のお給料ね。今回は振り込みなして」

更衣室に行こうとした私に、マネージャーの山田さんが封筒を差し出した。受け取ったそれには伊吹寧々様と、私の名前が書かれている。

「……は？」

「業績不振が続いて経営破綻。まあいわゆる倒産ね。退職関係の書類はあとで家に送付されるですよ。社長は今、銀行と取引先を回ってる」

「えっと、え？ 私、解雇ってことですか？」

「そうよ。私も含めて漏れなく全員、今日でおしまいだって。伊吹さんはこのまま帰っていいよ。皆にもそうしてもらった。私もこの整理が終わったら帰る。短い間だったけど、お疲れ様ね」

「……お、疲れ様、でした」

私は放心状態で返事をする。有無を言わせない雰囲気を感じ、封筒を握りしめたまま抵抗もできなかった。

いくら何でも急すぎない？ まだ勤め始めて二か月なんですけど。やっと仕事を覚えてきて、皆とも仲よくなり始めたところだ。何より、雑貨とはいえ念願の音楽に携われる仕事だったのに……！ 考えれば考えるほど頭が火照ってくる。抗議しようかと思っただけれど、社長がいないのではらちが明かない。

込み上げた怒りをどうにか呑み込み、外に出た。アスファルトの湿った香りが鼻をくすぐる。

「雨？」

広げた折り畳み傘の下、駅に向かいながら私は悶々と考えた。

経営破綻寸前だったのなら、どうして私を採用したんだろう。あまり、あと先考えない社長だったのだろうか。退職後のこと、きちんとしてくれなかったら訴えてやるんだから。

一応貯金はあるし、しばらくは大丈夫なはず。でも悠長に構えてはられない。すぐに次を探そう。できればまた音楽に関係した仕事に就きたいし。

家の最寄り駅まで電車で移動し、私は家路を急いだ。改札を出たときから雨足は強くなっている。あちこちでできた大きな水たまりのせいで、とても歩きにくい。気のせいかな、急に気温が下がってきたようだ。

「昼前だっというのに薄暗いし、雨はひどいし……無職だし。もう、どうしろと」

ぼやきながらアパートまで戻り、ドアを開ける。次の瞬間、私は愕然とした。狭い玄関の三和土が水で湿っている。入ってすぐのキッチンの床も水浸しだ。

「ちよ、ちよっとやだ、何これ!？」

雨のせい？ でも家の前の道は普通に歩くことができた。冠水なんかしていない。ということは、どこから水漏れしてる!？」

慌てて靴のまま家上がった。

キッチンの蛇口は閉まっている。すぐ横の扉を勢いよく開けてみるが、ユニットバスの蛇口からは何も出ていない。トイレでもない。恐る恐る引き戸を開けて六畳の洋間を見る。そこはキッチンよりもひどい有様で、床全体に水が広がっていた。

私はおろおろしながら、急いで大家さんと管理会社に連絡を入れる。

「ありゃー、これはひどいね。何が原因だろうか。お二階さんとお隣さんにも声かけてくるわね」近所に住む大家さんは、急いで管理会社の人ときてくれた。そして私の部屋を見て驚く。

「これ、もしかすると二階の配水管から漏れて壁を伝っている可能性がありますね。天井と壁の一部にも水が染みっていました。うちと取引のある業者が全て別件で出ているもので、早急に別の業者を呼んでいます。お時間をいただいて申し訳ありませんが……」

部屋の奥を調べていた管理会社の人が頭を掻きながら言った。

「どれくらいかかりますか?」

「ここに到着まで三、四十分ですかね。それから調べてもらうんで二時間以上は必要かと。年数

が経っている建物ですので時間がかかりそうです」

「じゃあ……携帯へ連絡をください。私はどこかで時間を潰していますので」

「本当に申し訳ありません。業者が到着しましたら、すぐにご連絡します」

戻ってきた大家さんに管理会社の人の言葉を伝えると、彼女は私に言った。

「業者さんが到着したら私が対応するわ。伊吹さんも、いちいち戻ってくるのは大変でしょう。部屋の今後の見通しがついたら、すぐに連絡するわね」

「すみません。よろしくお願いします」

とりあえず私は、部屋においてあった貯金通帳と印鑑を小さなバッグに入れた。降り続く雨の中、駅への道を戻る。

どうしてこうも次々と嫌な目に遭うのだろう……

今日は私の二十九回目の誕生日なのにな。こうなったらケーキのやけ食いでもしちゃおうか。それよりも、もしかしたら今夜寝るところがないかもしれないんだから、先にビジネスホテルを探したほうがいいかもしれない。でも、その前に次の就職先を――

「きゃっ!」

通りすぎる車が水しぶきを上げた。

霧が立ち込めたように視界が真っ白になり、咄嗟に横へ飛び跳ねる。歩道を歩く私のグレーのパンツが、右側だけぐっしりと濡れてしまった。

「もう信じられな、い……ん?」

傘の柄を両手で握っていることに違和感を覚える。私、バッグどうしたんだっけ……？

「う、嘘でしょ？ 何で持っていないの!？」

管理会社の人にスマホの番号を教えたときは絶対に持っていた。でも、そのあとのバッグの記憶が全くない。いろいろとショックなことがあつてぼうつとしていたせい？ あのバッグには今日受け取ったばかりのお給料と通帳や印鑑、クレジットカードや財布が入っている……！

さっと血の気が引き、足元がぐらりと揺れた。立っているのがつらいほど気が動転している。どうしよう、どうすればいい……？

すれ違う人が私にぶつかると顔を上げた私は、目についた近くの交番によるめきながら駆け込んだ。「す、すみません！ 失くしものをして……バッグなのですが、中にお給料と、あ、あと、通帳とカードも……！」

「はいはい、とにかく座って落ち着いて。お話聞きますから」

「あつ……はい」

年配のお巡りさんは慣れつこといったふうな対応で、私に椅子へ座るよう促した。ボールペンと用紙を差し出される。

「ここに連絡先と失くしたものの書いてね。カード類や現金はなるべく詳しく。これ、よかつたらどうぞ」

「すみません。ありがとうございます」

ペンと一緒にタオルも渡され、濡れたパンツを拭く。髪も湿っていた。お巡りさんの優しさが身

に沁みる。

「家は近いんだね。これなら財布がなくても帰れるかな？」

「そう、ですね。とりあえずポケットにスマホとICカードがあるはずなので」

ポケットの中身を確認する。スマホケースにICカードと免許証が入っていた。

「カード類の紛失の連絡は早急にしておいてね。電話番号は携帯で調べられるよね？ それともここで調べて電話していく？」

「あ、いえ。自分でします」

「川に落としたりとか、そういうんじゃないかなければ戻ってくる可能性は高いから、あまり気を落とさないで。まあ、現金はちよつと保障できないけど」

「……ですよね。お世話になりました」

交番を出ると、外は土砂降りになっていた。

なんかもう泣きそうだよ。とにかく一旦落ち着かないと。どこか雨宿りできそうな場所を探して、コーヒーでも飲むことにしよう。そこからカード会社へ連絡を入れればいい。

なんとか気持ちは奮い立たせ、コンビニに入った。温かい缶コーヒーを選んでレジに並ぶ。けれど、カードをかざすと……！

「申し訳ありませんが残高不足のようです。現金でお支払いなさいますか？ それともチャージがよろしいでしょうか」

「え、あ、じゃあ、やめておきます。すみません……！」

たかが缶コーヒーの代金も持っていないなんて、どう思われただろう。あまりにも恥ずかしくて、私は逃げるようにそこを去る。自動ドアを出て傘立てに目をやると、なぜか私の傘がなかった。

「え？ ちよつ、え？」

何度見てもやっぱりない！ 別の傘を持っていくわけにはいかないし、お店の中に戻るの嫌だ。コンビニの軒下のきしたで途方に暮れて灰色の空を見上げる。雨は一向に弱まらない。今度こそ涙が出そうだ。

奥歯を噛かんで涙をこらえた私は、ポケットからスマホを取り出した。友人ふたりのSNSに連絡を入れる。上京してすぐに勤めた職場の同僚と、数年前にパソコン教室で知り合った女性だ。

ふたりとも仕事申中のだろう、すぐに返信はない。と、そこでスマホの充電があと少ししかないことに気づいた。……最悪。

太腿ふとももに貼りつく乾き切らないパンツが不快だ。早く、充電ができて服が自然に乾きそうなところへ移動したい。

「どうしよう」

ここから一番近い携帯ショップの場所を必死に思い出ししていると、商品補充のためのトラックが目の前に駐車した。お店の中からさっきの店員が出てきて、こちらに視線を向けている。

これは絶対、変に思われてる……！ 角を曲がったすぐのところに、別のコンビニがあったはず。とりあえずそこに移動しよう。

私はスマホをポケットに入れながら、軒下のきしたを飛び出した。

「きゃー！」

「あー！」

お店の角を曲がるうとした直前、同じように走ってきた誰かとぶつかってしまった。衝撃でポケットに入りきらなかったスマホが落ちる。

手帳型のケースがひらき、液晶画面を下にしてスマホは歩道の水面を滑すべっていく。まるでスローモーションのように、その光景がはつきりと私の目に映った。

「あ、あ、あーっ!!」

慌あわてて駆け寄り、しゃがんで、水たまりに浸ひかったスマホをひったくるように拾い上げる。

「う、嘘うそお！」

液晶画面は真っ暗。電源ボタンを押しても何の反応もない。防水仕様じゃないのはわかっていたけれど、まさかこんな一瞬でダメになるとは。

これでは大家さんや管理会社、警察、友人たちからの連絡を受けられない。それどころか、クレジットカードやキャッシュカード会社への紛失届けも無理だ。

「も、もうやだあ……!!」

必死に我慢していた涙がぼろっと零こぼれた。

突然無職になって、家は水浸みずびたし、お給料の入ったバッグを失なくし、チャージも充電も傘もない。

その上、唯一頼りのスマホは水没。

二十代最後の誕生日だというのに、私は神様に見放されちゃったの……？

「すみません、大丈夫ですか!？」

「全然……大丈夫じゃ、ないです」

話しかけられ、私は自分にぶつかったと思われる人を見上げた。スーツ姿のその男性は心配そうにこちらを見つめ、私に傘をさしかけている。

その人に、私は思わず見とれてしまった。

何このイケメンは。

吸い込まれそうな黒い大きな瞳。すっと通った鼻筋と形のよい薄い唇。さらりとした黒髪は短すぎず長すぎず、清潔感を保ちつつも、どこか色気が漂う。細身の体型に合わせた品のよいスーツがとでも似合っている。最悪な状況で雨に打たれていることを一瞬忘れるほど、私好みの容姿だ。

彼はしゃがんで、私の顔を覗き込んだ。

ときが止まったかのように見つめ合いながら、ふと思う。この人、どこかで見たことがあるような――

彼が上着からハンカチを取り出し、私の頬を拭いた。

「あ……」

まさかそんなことをされるとは思わず、私の口から声が漏れ出てしまう。

「すみません。濡れていたから」

彼が申し訳なさそうに手を引っ込める。そして、視線を私の手元に移した。

「それ、僕に弁償させてください」

「え？」

「僕がぶつかったせいで故障してしまっただんですよね」

男性は立ち上がりながら私に手を差し伸べる。大きくて綺麗な手のひらに、私はおずおずと自分の手を乗せた。彼は優しく私の手を握ると、力強く引っ張って立ち上がらせてくれる。

「ここから一番近い携帯の店は、どこかわかりますか？」

「弁償って、今ですか？」

「ええ、早いほうがいいでしょう。それとも、お時間ありませんか？」

「い、いえ、それは大丈夫ですけど、でも……」

「ひどい雨だ。急いで行きましょう」

こちらに傘を傾けた彼は、私の背中をそっと押した。自分が濡れるのもかまわず、私と一緒に歩き始める。

一度にいろいろありすぎたせいか頭がうまく回らない。雨に霞む街の中、ぼうっとしたまま彼と一緒に歩き始めた。

私たちは駅に直結したショッピングセンターに入り、入口近くの携帯ショップでスマホの機種変更をした。彼が順番を待っている間にタオルを買ってきて、体を拭くよう勧めた。そして私に気を遣わせないためののか、お金を払うとき以外は離れた場所で待っている。



弁償してもらうなんて図々しいとは思うけれど、今は正直ありがたい。お金はあとで返すことにして、彼の厚意に甘えてしまった。

「ありがとうございます。すみません、時間もかかってしまっただけです。既にシヨップに入ってから一時間近く経っています。」

「いえ、こちらこそ本当に申し訳ありませんでした。」

「お金はあとで必ずお返ししますので。」

「弁償ですからいりません。それより、どこかで軽くランチでもしませんか？ お腹空いたでしょう。」

「私、今はお金を持っていないので遠慮します。それよりも、スマホの代金を返——」

彼は手を上げて私の言葉を遮り、優しく微笑んだ。

「ご迷惑をかけたお詫びにごちそうさせてください。実は僕が腹ペコなんです。遠慮せずに付き合っていたけると助かります。」

いくら彼がぶつかつたせいで携帯が壊れたとはいえ、私の不注意のせいでもあるのに。

そう思いつつも、スマートな強引さと屈託のない笑顔に負けてしまった。こうなったら食事中に、返金を納得してもらおう。

私は昼食の誘いに了承の返事をする、少し待ってもらい、銀行やカード会社に紛失の連絡を入れた。スマホにはアパートの管理会社からの留守番電話が入っている。内容は、調査に夜までかかりそうなので、あとで再度連絡をすることだった。

全ての連絡を終えたあと、シヨッピングセンターの最上階にできたばかりのイタリアンのお店に

移動する。この店に入るのは初めてだ。彼にもらったタオルのおかげで、服も髪も乾いており、安心してお店に入ることができた。

不幸な出来事続きでも、すっかりお腹は空くらしい。

濃厚なゴルゴンゾーラソースがかかった生麺の Pasta は香りが強く、とてもおいしかった。とりあえず人心地ついたから、よけいにおいしく感じるのかも。

「おいしそうに食べますね。」

彩りよいサラダを頬張る私を見て、彼がクスツと笑う。

「す、すみません私、図々しいですよね。」

「いやそうじゃなくて、いいなあと思って。一緒にいる僕まで幸せになる。」

再び笑った彼は、小海老とプロッコリーのトマトクリーム Pasta を口に入れた。その笑顔と食べ方を見てなぜか胸がじんわりとする。初めて会った人なのにどこか懐かしい感じがするのは、この人が私好みの容姿だからだろうか。

「おいしいものを食べると、元気が出ます。」

「元気、なかったんですか？」

私は彼の問いかけには答えず、質問を返す。

「あの、あなたのご近所の方ですか？」

「……いえ。仕事で取引先から戻るところです。」

「お仕事って……お時間は大丈夫なんですか？」

「ええ。今日の仕事はもう終わっていますので。あなたこそ急いでいましたよね？ 今さらですが  
そちらは大丈夫なんでしょうか？」

ここまでしてもらって、何も教えないわけにはいかないか。  
「大丈夫、と言いたいところなんですが……今日は嫌なこと続きの日だったんです。なので、おい  
しいものを食べてとても元気が出ました」

半日でこんなにもいろいろなことが重なるなんて、むしろ貴重な体験かもしれない。苦笑しながら、  
冷たいレモンスカッシュを喉の奥へ流し込んだ。

「何があったのか、差し支えなければ教えてください」

心配そうな声に促され、彼に出会うまでに起きたことを事務的に話した。いかにも可哀想な女に  
見られるのは嫌だし、惨めにはなりたくなかったから、あくまでも淡々と説明する。

「ということは、夜に管理会社からの連絡が入るまでは、まだお時間あるんですね？」

話を終えたところで、黙って聞いていた彼が真面目な顔で私に訊ねた。

「え？ ええ、まあ」

次に管理会社から連絡がくるのは「早くても夜になる」という話だ。

「でしたら、クラシックコンサートのチケットがあるので、時間潰しのついでにご一緒していただ  
けませんか？」

「クラシックコンサートですか？」

意外な申し出に胸が高鳴る。

「実は、仕事関係で手に入れたのですが、一緒に行くはずの者が急に都合が悪くなって、チケット  
が余ってしまったんですよ。興味がありませんでしたら、いかがでしょうか？」

「私、クラシック大好きなんです……！」

久しく生のオーケストラなんて聴いていない。思わず顔を綻ばせてしまった。

「それはよかったです。赤坂にあるホールなんです。今日の公演は開演時間が五時半、終わるのは九時  
前くらいになると思うのですが、よろしいですか？」

「ええ、大丈夫です」

私の返事を聞いた彼は嬉しそうに……こちらが戸惑うくらい笑顔で頷いている。チケットが余  
らずに済んだことが、そんなにも嬉しいのだろうか。

彼の笑顔が再び私の心に問いかける。やはりどこかで会ったことがある人ではないかと。

「では行きましょうか。その前に銀座で買い物があるので付き合ってください」

「あ、はい」

彼の声が弾んだ調子に変わったのは気のせい？

喜ぶ様子につられた私は、深く考えずに彼のあとをついていく。

地下鉄の切符を買ってもらい、銀座まで移動すると、雨はすっかりやんでいた。雲間から光が差  
し込む街をふたり並んで歩く。

彼は誰もが知っているであろう高級ブランドショップに入った。主に安いネット通販やファスト  
ファッションブランドを利用している私には、全く不慣れな場所だ。人の少ない静かな空間に必要

以上に緊張してしまう。

「いらつしやいませ、本日は——」

「いや、いいんだ」

こちらを見るなり急ぎ足でやってきた男性店員を、彼が片手を上げて制した。

「今日は、彼女とゆつくり見て回りたいので」

「かしこまりました。ご用がおありのときは、何なりとお申しつけください」

「ありがとう」

もしや彼はここの常連客なのだろうか。こんな高級ブランド店で!?

一体、何を購入するのかと疑問に思う私の腰に、彼がそつと手を添えた。そしてレディースウェアのコーナーに連れていかれる。品のよい服が、ひとつひとつゆつたりとポールにかかっていた。大切にディスプレイされたその素敵さに、ため息が漏れそうだ。

「こういうのはどうでしょう? あなたはお好きですか?」

彼が示したのは、袖と襟ぐりがシフォン素材の黒いシルクワンピースだった。

「ええ、とても素敵ですね」

「ではこれにしましょう」

「は?」

「すみません、試着したいのですが」

振り向いた彼が、そばにいる店員に声をかける。何のことやらわけがわからず、彼に訊ねた。

「あの、試着って」

「着てみてください。きつと似合う」

「え!? わ、私が着るんですか!」

「どういうこと!? 彼の買い物きたんじゃないの!」

「もちろん、あなたが着るんですよ。早く着て見せてほしいな」

「ちよ、ちよつとそれは、いくら何でもあの」

うるたえる私をもとめせず、彼は店員へワンピースを渡してしまった。

「試着室へご案内いたしますので、こちらへどうぞ」

「さあ行きましょう」

こんな場所で騒がしくするわけにはいかない。雰囲気呑まれて断れない私は、彼と一緒にサロンのようなところへ通された。

大きなソファが置かれ、壁の一面が巨大な鏡になっている。彼はそのソファに座って待ち、私は三つ並んだ個室のひとつに案内された。個室は全て空いていて私たちの他には誰もいない。中に入ると、私のアパートの部屋よりも広かった。

「お手伝いいたしますので、いつでもお声をおかけください」

「は、はい……」

カーテンが閉まった。仕方なく、着ている服を脱ぐ。大きな鏡が私の下着姿を映し出した。

ああ、広すぎて落ち着かない。どうしてこんなことに。それよりも、こんなブランドショoppの

服を買えるわけがない。試着すれば彼の気も済むのだろうか。

ぐるぐる考えながら、素晴らしく肌触りのいいワンピースを着てみる。

胸元はほどよくひらき、背中や腰のラインが美しく見えるようにカットイングされている。丈は膝に少しかかるくらいでとても上品だ。ワンピースのおかげで、いつもの自分と全く違って見える。けれど、気持ちが高揚したのは一瞬だった。着替えながら三十六万円という値札を見つけてしまった私は、そればかりが頭にチラついて一刻も早く脱ぎたくて仕方がなくなる。

汚してしまつたらどうしよう。想像するだけで恐ろしい。

「ああ、やはりとてもよく似合っている。綺麗だ」

着替えた私を、待っていた彼が目を細めて称賛した。後ろから両肩にそっと手を置かれ、壁面の鏡の前へ進んでいく。私と彼の姿が鏡に映った。

この人、とても背が高いんだ。私は百六十センチそこそこだから、彼は百八十センチくらいだろうか。足が長く、スタイルがとてもいい。

「これに合う靴もお願いします」

見とれていた私をよそに、彼が言った。

「かしこまりました、少々お待ちくださいませ。本当によくお似合いでいらっしやいますよ」  
美人の女性店員がにこやかに言い、そこを離れる。

「いやあの、ちよつと」

焦って店員を呼びとめようとするも、彼女は既に行つてしまつた。

「気に入りませんか？ では別の服にしましょうか」

「ま、待つてください！ そうじゃないんです」

振り向いた私を、彼がぎよんとした表情で見つめる。

「気に入りました、とても。でも、食事中にお話した通り、今の私は持ち合わせがないんです。それに、あとでお支払いするにしても、こんなに高価な服は買えません」

「あなたが買う必要はありませんよ。これは全てお詫びなんです。だから気にしないでください」  
「き、気にするなと言われてもですな」

「夜のコンサートへは、オシャレして行きましょう。そうしたらもつと元気が出るかもしれませんよ。ね？」

私を諭すような優しい笑みを受けて、何も言えなくなってしまう。

試着室に置いた私服が脳裏をよぎった。カジュアルなパンツにジャケット、足元はスニーカー。おまけに雨で汚れている。夜のオーケストラに行く装いとしては適当じゃない。誘ってくれた彼に恥をかかせてしまうかもしれないのはわかる。落ち着いたら分割してでも返そう。

諦めた私は彼の申し出を一旦受けることにして、靴の試着を始めた。

支払いの際、彼が提示したブラックカードが見えてしまった。スマホを購入したときは見間違えたのかと思つたけど、確かに見た……！

この人一体、何者なんだろう。私と変わらないくらいのに、ブラックカードを所持する、高級ブランドショップの常連客——

「そろそろどうでしょうか」

お店を出たところで彼が質問をしてきた。急な話題についていけない。

「どう、というの？」

「いえ、まだかなあとと思って」

「……？」

何が「まだ」なのかわからない。困惑する私に彼は楽しそうに笑いかけ、説明することもなく、また別のお店へ連れていく。

バッグまで購入してもらい、タクシーで赤坂にある音楽ホールへ向かった。私が着ていた服はブランドショップの袋に入れられ、彼が持ってくれている。

豪華な装いをして、こんなに素敵な人とこれからオーケストラに……。今さらだけど、ここまでしてもらっていいのだろうか。

「申し訳ありません」

「ん？ どうしました？」

「スマホの代金を立て替えてくださっただけで十分なのに、これではかえって申し訳なさすぎて」

「スマホは弁償ですよ。それに僕がしたいことあなたを付き合わせているだけです。お気になさらず。それとも、やはり気に入りませんでしたか」

「い、いえ！ そんなことは全然！」

「それならよかった。コンサート楽しみですね」

「えっと……は？」

「またもや嬉しそうにされて、頷くしかなかった。それにしても私、この笑顔に弱いなあ……」

音楽ホールへ到着した私たちは、二階のバルコニー席へ案内される。時間はぎりぎりだったようで、座って間もなく開演のベルが鳴り響いた。一階も二階もほぼ満席だ。

「中央ではなくて申し訳ないのですが」

「いえ、とんでもないです。とてもいい席で舞い上がっています。嬉しい！」

謝る彼に興奮しながら伝える。私は広い音楽ホール独特の匂いを胸に吸い込んだ。

演奏者たちがそれぞれの席へ集まり、調音が始まる。

「プログラムの一曲目なんですが、見えますか」

ひらいたパンフレットのページを、彼が指さした。

「ええ。ポロディンの……『鞭鞭人の踊り』ですね」

「皆でこの曲を聴いたのを覚えてる？」

「え？」

急に碎けた彼の口調に驚いた。それだけじゃない。彼は今、何て……？

「あ、始めますよ」

コンサートマスターと指揮者が登場し、大きな拍手が響き渡る。私も彼も同じように手を叩いた。指揮者がタクトを振り、ゆったりとした演奏が始まる。静かなオーボエの旋律が流れると同時に、私の脳裏にある光景が現れた。

部活のない日。学校帰りに寄った部活仲間の家。録画されたコンサート。皆でお菓子を食べながら、思い思いに曲の感想を述べた。今、ホールに流れているのは、その中の一曲――

今朝見た夢を思い出す。

もしかして私の隣に座るこの人は、憧れのホールへ一緒に行こうと約束した、初恋の人……？ そんなことが、あるのだろうか。彼の言う「皆」が、私の思う部活仲間だということが。

隣に座る彼へ視線を送った。横顔に面影はある。特徴的だった指の形も似ている。細身とはいっても肩幅も胸板も、当時よりがっしりとして、大人の男性に成長している。あの頃は私より少し背が高いくらいだったのに。革靴を履いている足も、私と比べてずっと大きい。懐かしさを感じていたのは、彼が神谷くんだったから……？

激しく叩かれるティンパニーのように、私の心臓が音を立てた。

名前を聞いて確認してみたい。でも私の思い込みだったら、とてつもなく恥ずかしい。勘違いするほどに初恋を引きずっている自分に出会うことが、怖い。

オーケストラを聴きながら、私はどこか上の空でいた。休憩時間がきても、彼の口から言葉の続きは語られない。彼はホールを出て、ホワイエと呼ばれる劇場のロビーへドリンクを取りにいってしまう。ホワイエでは、コンサートの客が歓談できるようにテーブルが置かれ、シャンパンや軽食が売られている。一方私は、スマホを確認するためにレストルームへ。やはり管理会社からの連絡が入っていた。今夜中にはどうにもならないらしい。友人らのSNSに既読マークがつき、「どうしたの？」とそれぞれ返事がきている。コンサートの終了は九時近い。平日の夜遅くに彼女らの部

屋へお邪魔するのは気が引ける。結局、今夜はビジネスホテルに泊まることになりそうだ。

ため息をつきながら、私はホワイエにいる彼のもとに戻った。

「どうしました？」

待っていた彼は私にシャンパンを差し出し、心配そうに訊ねてくる。

「えっ、いえ。素晴らしい演奏でした。私、『アルルの女』の『フアランドール』が大好きなんです。とてもかっこいい舞曲ですよね」

私は受け取ったシャンパンに口をつけた。細かな泡と甘い香りが舌の上で弾ける。

「そうですね。あなたが楽しんでいらっしやるならよかったです」

彼が嬉しそうに微笑んだ。

せっかくのコンサートなのに暗い顔なんてしていたら失礼だ。それに、私にとってはビジネスホテルよりも、もっと重要なことがある。彼に確かめなければいけない大事なことが。

意識して彼の顔を見れば、やはり神谷くんに似ている。神谷くと離れてから、何度も見つめた部活の集合写真やグループ写真を思い出した。……確かめたい。

『鞞鞞人の踊り』も、好きです」

この曲を、皆で部活の帰りに聴いたんだよね？

そう訊ねようとしたとき、シャンパンを飲み干した彼が私をまっすぐ見つめた。

「まだ、クラシックが好きだったんだね。伊吹さん」

名字を呼ばれてどきんとする。この人……！！

「そろそろ僕のことを思い出してくれましたか」

「あの、お名前を教えてください。もしかしてあなたは」

「僕は神谷貴志たかしです。中学では、あなたと同じ吹奏楽部でした」

「やっぱり……！ 本当に本物の……神谷くん、なの？」

「思いもよらなかった偶然に声が震えてしまう。」

「うん、本物だよ。忘れられてたらどうしようかと思っただけど、やっと思い出してくれたんだね」  
彼がとても嬉しそうに笑った。ああ、神谷くん。食事中にこの笑顔を見て懐かしくなったのは、当然のことだったのだ。

「だって、だって全然違うんだもの。すっかり大人の男性だし、背もすごく伸びてるし、体型も」

「あれから十年以上も経たてば変わるよ。でも僕は、すぐに君のことをわかったけどね」

「すぐについて、いつ？ 出会うってすぐのこと？」

もしかして、スマホを拾ったときにこちらを見てしばらく黙っていたのは、私に気づいたから？  
「ヒミツ。まあでも、携帯ショップで君が受付に名字を言っていたのを聞いて確信したというのはあるね。これだけじゃまだ疑わしいかもしれないだろうから、ふたりにしかわからないことを伝えようか」

悪戯いたづらっぽい笑い方をして私の顔を覗のぞき込んだ神谷くんは、小さな痛みが胸を襲むった。

「もしや私、ときめいてる……？」

「ふたりにしかわからないことって」

「大人になったら軽井沢のコンサートホールへ一緒に行こう。そう約束した」

「覚えて、たの？」

「もちろんだよ。絶対に忘れないと約束したんだ。君も忘れないでいてくれたんだね」

「うん……うん！」

嬉しさが込み上げて、思わず涙ぐむ。中学生のときに交わした頼りない約束を覚えていてくれたなんて感動だ。

神谷くんは目を細め、私の背中に優しく触れる。

「そろそろ後半が始まる。行こう」

「……はい」

それにしても何という縁だろう。誕生日に神様に見放されるどころか、素晴らしすぎるサプライズプレゼントをもらってしまった。だってあれから、何年が経たった？ 十四年だよ？ こんな偶然って、ある？

テンポのよいアンコール曲を楽しんだあと、私たちは大勢の人たちとともにホールから出た。少しの雲を残した夜空に月が光っている。外気はゆるい暖かさで満ちていた。

「すごくよかった！ 誘ってくれてありがとう」

「どういたしまして。伊吹さんはコンサートによく行くの？」

「時間とお金に余裕があれば。本当はもっと行きたいんだけど滅多に、ね。神谷くんは？」

「結構聴きに行くほうだと思ふよ。演奏自体は中学以来、全くしてないけどね」  
「私も同じ」

楽器は大切に持つていても、演奏する場所や機会はなかった。いつかまたトランペットを吹いてみる日がくるのだろうかと思つたそのとき、彼が立ち止まった。

「ずっと、どこにいたんだ……？」

真剣な表情で私を見つめている。誰にも告げずにいなくなった私を責めているわけではない、切なげな声だった。

雨後の湿った風がワンピースの裾を揺らす。道路を歩き交う車の赤いテールランプがやけに眩しく感じた。広い歩道に佇む私たちの横を、コンサート帰りの人々が追い越していく。

「ふっ、っつて」

「いや、ごめん。話したくないか」

「ううん、大丈夫。引越し先のことだよな？ 何も言わないで転校して、ごめんなさい」

「君が謝ることはない。僕のほうこそ無神経なことを聞いて、ごめん」

再び歩き出した彼の隣に私は並ぶ。

「伊吹さん、結婚は？」

「してないよ。神谷くんは？」

「僕もしてない。独身だよ、ほら。恋人もいない」

彼は指輪のない左手を、私の前に差し出した。

「君は？ 結婚はしてなくても、付き合ってる人はいるの？」

「私もない、けど」

そんなふうに質問されると困ってしまう。彼は今の私に興味があるのだろうか。

駅が見えてきた。彼が神谷くんだとわかつたならなおのこと、お金についてはきちんとしておきたいと思つた。それに、このままお別れというのは正直……少し寂しい。

「神谷くん、連絡先を教えてください。いいとは言つてくれたけど、支払わせてほしいの」

「本当にいらないんだが……」

「スマホを弁償してもらつただけで十分よ。洋服やバッグ代は、ちゃんと払わせて」

「いや、あれは僕が強引に買ったんだから君は気にしなくていい」

「ダメ。そこまでしてもらうのは申し訳なさすぎるもの」

「困つたなあ。どうしても引いてくれる気はなさそうだね。頑固なところも変わってない」  
笑つた彼は、歩道脇にある公園へ私を引つ張り込んだ。入口近くの外灯の下で向き合う。

「それじゃあ取引しようか」

「取引？」

「実は……見合いを勧められていてね。僕にその気は全くないんだが、強引に押し進められそうなんだ。君にその見合いを壊す協力をしてほしい。それで洋服代はチャラにしようよ」

「お見合いを壊す協力って、何をすればいいの？」

「僕のニセの恋人になつてくれないか」



「え」

二セの恋人……？ 思いもよらない提案にしばし呆然とする。

「僕に恋人がいれば、相手側も諦めるはずだ。その役を引き受けてほしい」  
「でも……そんなことして大丈夫なの？」

「ただ断るだけじゃ説得力がないからね。離れられない恋人がいるとわかれば諦めるだろう。前から考えていたんだが、誰にでも頼めることではないから悩んでいたんだよ」

それで、私に恋人がいなかどうかを確かめたんだ。最初から私に二セの恋人役を頼むつもりだったとか。まあ、そういうことなら納得。……のはずなのに、何だろこの拍子抜け感は。やっぱり心のどこかで期待していたのかな。

「私でお役に立てるなら」

思いがけず浮かんだ気持ちを否定するように私は平静を装った。

「いいの？」

「うん、いいよ」

昔の同級生が困っているのなら助けてあげたい。うん、恋人のフリくらい何でもないことじゃない。ありがとう！ 助かるな」

イケメンにそんな無邪気な笑顔を見せられたら、誰だって断れないよ。

「では早速、恋人としてお願いしたいことがある」

「はい、どうぞ」

「僕が泊まる予定の部屋においでよ。今夜はずっと一緒にしよう」

「……はい？」

「仕事の都合でね。今夜は家に帰らないんだ」

「本気で言ってるの？」

「本気だよ。恋人らしくするためには、まず一緒にいないとどうしようもない。恋人関係の空気に慣れてもらうにも必要なことだ。見合いの相手サイドに嘘を見破られないためにもね」

「そ、それはそうかもしれないけど」

お見合い当日に恋人のフリをするだけじゃないの!?

「この件を承諾してくれるなら、君の職場も住むところも僕が用意させてもらう。いや、させてくれ」「いくら何でも、そこまでお世話になるわけには」

「二セとはいえ、僕の恋人役を演じてもらうんだ。君の生活にだって支障が出るだろう。これくらいのことをするのは当然だよ。それに」

言葉を止めた神谷くんが、優しげに笑った。

「今夜はこのあと、どうするつもりだったのかな。コンサートの休憩時間に、管理会社からの連絡を確認したのでは？ 僕の予想を言わせてもらえば、君が言っていたような部屋の浸水がある場合、今夜中にもとへ戻すことはまず不可能だ。こんなに遅い時間では、友人の家に押しかけるのも気が引ける、そこでどこかのビジネスホテルにでも泊まるつもりだった。違う？」

「っ!」

何から何までお見通しの彼に、返す言葉がない。

「凶星だね。さあ行こう」

「ちよ、ちよっと待って。子どものお泊まりじゃないんだから、そんな簡単に」  
掴まれた手首を引いて足を踏ん張った。

神谷くんとのまま会えないのは寂しい。そう思ったことを否定はしない。でも私たちは「ニセ」の恋人になるのよね？　そこには恋も愛もないのよね？　だから気軽においでと言われても困る。誘われてすぐに男と寝るような女だと思われるのも嫌だ。初恋の彼にだけはそんなふうには思われたくない。

その場から動こうとしない私に、神谷くんが小さくため息を吐く。観念したのか、掴んでいた私の手首を離れた。

「さっきの質問の答えだよ。僕の連絡先だ」

彼はスーツのジャケットの胸元から名刺入れを取り出した。受け取った名刺を見て思わず目を見ひらく。

「その年で専務取締役!?　神谷グループって……え、ちよっとまさか」

神谷グループといえば国内の不動産部門における大企業だ。都心の高層ビル建設や都市再生事業にもかかわっている総合デベロッパーのはず。新聞やネットニュースでよく見かける名前で間違いはない。所在地は有楽町と記されていた。こんな大きな会社の専務取締役って……

「僕の曾祖父が社の創設者、祖父が理事をしている。父が現在の代表取締役だ。僕がいずれそのポ

ストを継ぐ」

彼は神谷グループの御曹司だったの!?

神谷くんの正体に驚きながら考える。大きな組織の上に立つ人がこんなことを頼んでくるなんて、よっぽど困っているのしか思えない。私だって協力してあげたいのは山々だ。

「言い方は悪いが、僕のような地位にある人間の恋人だと見合い相手に信じさせるためには、それなりの服装や生活が必要だ。それもあつて君に職場や住まいを提供したいと思っっているんだよ」

「そこはわかるんだけどね。でも——」

「だがそれ以上に、恋人として君が困っているのは見すごせない。今夜は一緒にいよう。何もしないよ、きてくれるね?」

なぜか彼の声色と言動が切羽詰まっているように感じる。

「ニセの恋人でも心配なの?」

「そうだ」

当然だと言わんばかりの返答だった。ここまで言われたら信じてみようか。素性を明かしてくれたこともあり、私は神谷くんについていくことに決めた。彼を助けてあげたいと思った気持ちは本物だ。一度引き受けたからには責任だつてある。

見上げた空には星が瞬いている。その光は思い出の日を彷彿とさせた。

軽い食事を済ませて、神谷くんが泊まるという銀座のホテルへ向かう。

受付は普通のチェックインカウンターではなかった。彼はホテルの上級会員なのかもしれない。名刺の肩書きやブラックカードの件を思えば当然か。

こんな高級ホテルに入ったことがない私は、緊張に身を縮ませた。

「アパートの部屋が落ち着くまで、何日いてもらってもかまわないからね」  
とんでもなく広いスイートの部屋に入るなり、彼が言った。

「いくらなんでも、何日もというのは」

「ここは、父や僕の仕事関係者を招く部屋で年間契約してある。このあとしばらく誰も使う予定はないんだ。心配しなくていいよ」

さらりとそんなことを言われても、どう返事をしていいのやら困ってしまう。

「僕の部屋はあっち。君はそっちね。部屋にトイレもバスルームもついている。気兼ねなく使って」

「あ、ありがとう」

「こっちへきてごらんよ。空がすっきり晴れてる」

明るいい声に誘われて、彼の立つリビングの窓際へ寄った。

「すごい……！ 夜景が綺麗」

高層ビル群やマンション、商業施設の灯りが、まるで宝石のように輝いている。素晴らしい部屋から眺める見たこともない景色に胸が躍った。

この広い東京で神谷くんに再会できたのは奇跡に近い。しみじみ思っていると、突如肩をぐっと掴まれた。あつという間に彼の胸に抱かれる。

「か、神谷くん!？」

「君のほうが綺麗だよ、ずっと」

何なの、このキザなセリフは……！ あ、そうか。

「もう始まつてるの?」

「え?」

「ニセモノの恋人」

「……そうだね。始まつてるよ」

神谷くんは苦笑して、私の両頬をそっと両手で押さえた。彼の黒い瞳に私が映っている。演技だとはわかっていても、ドキドキしてしまう。

「伊吹さんは僕の初恋の人なんだ」

「っ!」

胸がぎゅゅと痛くなる。もしそれが本当なら、どんなに嬉しいだろう。私は、あなたが初恋の人なのだから。そのセリフを中学生の頃に言ってもらえたら……

「だからずっと……こうしたかった。急に僕の前からいなくなつて、連絡が取れなくなつたから、傷ついたらよ」

罪悪感がせり上がる。私が転校先も告げずに、そのまま皆と連絡を絶つたのは事実だ。

「とても好きだった。再会した今、あの頃の君を思う気持ちが甦っている」

「えっ!」

「その反応、恋人らしくないな。ちゃんと演技してくれないと」  
目の前の彼が眉をひそめた。

「だって、いきなりそんなこと言われたら、あ」  
彼の長い指が私の顎を持ち上げる。

「ちよっ、神谷く、ん……っ！」  
避ける間もなく、あっという間に唇が重なった。  
神谷くんとキスしてしまった！

軽くパニックになりながら、私は彼の胸を押して自分から唇を離す。

「な、何もしないって言ったのに……！」

「周りの人間を信じさせるためには、こういうことも必要だ」  
クスツと笑った彼は再び私を抱きしめた。爽やかな大人のフレグランスが私を包む。

「キス以上のことはしないよ。ただ……心配なんだ」

神谷くんの不安げな声が私の胸をざわつかせる。そういえばさつきも同じことを言っていた。そんなにも私が頼りない人間に見えるのだろうか。

「ニセの恋人を演じている間は、僕の他に本当の恋人を作らないと約束してくれるかな」

「そんなつもりはないけど……どうしてそんなに心配なの？」

体を離れた神谷くんは、私の背中を窓ガラスに押し付けた。両手をガラスに置き、私を腕の中へ閉じ込める。

「君に本当の恋人がいると見合い相手に知られたら困るじゃないか」

公園のときと同じように彼が優しく微笑んだ。

私の行動だけではなく、心の内まで見通されていたらどうしよう。そう思ったとき、強く唇を塞がれた。

「んっ、んう……！」

逃げようにも逃げられない。生ぬるい舌が私の口内へ入り込む。心臓が破裂しそうに激しく鳴っていた。

「んふ、んんっ、ん」

捉えられた舌尖に彼の舌が優しく絡む。情熱的なキスを受けた私は頭の芯がくらくらして、どこにも力が入らない。キスをすること自体が久しぶりのせいか、体が過剰なほどに反応している。よろけそうになる私の腰を、神谷くんの手が支えた。

「んっ、あ……」

唇が離れてホツとしたのも束の間、くすぐったい刺激を耳に受ける。間近で、ちゅっという音がした。

耳が弱いことを悟られてしまう……！

「神谷くん、ダメ、やめて」

体をひねっても逃げられない。「好きだった」という彼のニセモノの言葉が私に魔法をかけ、身動きできなくする。

耳が熱い。耳どころか、顔も首も真っ赤になっているはず。神谷くんは私の耳を何度も甘噛みした。そのたびに崩れ落ちそうになるのを何とかこらえる。そうこうしているうちに、ぬるりとした感触が耳の中に入った。

「あっ！」

もう本当に、ダメ……！

「君も言つて。僕への気持ちを」

彼の熱い息がかかる。こちらを見たその瞳には、彼の共犯者になろうとしている私が映っていた。呼吸を整えた私は、あの頃の気持ちを小さく吐き出す。

「私も、神谷くんが、好き」

「いつから？」

我に返って恥ずかしくなる。だって私のほうは嘘ではなくて、当時の本当の気持ちなんだから。

「……部活で神谷くんと同じトランペットのパートになって、ずっといいなと思ってた。三年生のときに同じクラスになってからはもっと、好きになってた」

「ありがとう。僕も……好きだよ」

彼に告白をして、そう答えてほしかつた中学生の私がいる。思い出してもどうしようもないのに、今さら馬鹿みたいだ、私。

「伊吹さんは綺麗になったね」

「神谷くんは、とても素敵になった。すっかり大人の男性だね」

私の言葉は本心だよ、神谷くん。あなたに恋人がいないなんて信じがたいくらい、素敵になった。彼の腕の中にいると、私の胸の奥で燻っていた初恋が、少しずつ昇華されていくような気がする。でもそれは、嘘の言葉で錯覚しているだけなんだろう。

「勝手にこの部屋を出て、いなくなったりしないでね」

神谷くんは私を抱きしめていた手をほどいた。

「え？ そんなことしないよ」

「……その言葉を信じるよ」

どうしてだろう。ぼつりと呟く彼が悲しそうに見えた。

「じゃあね。ゆっくりおやすみ」

「おやすみなさ〜」

彼は宣言通り、キス以上のことはせずに自分の部屋へ行ってしまった。窓に寄りかかり、唇に指をあてる。窓ガラスに情けない顔をした私が映っていた。

「神谷くんキス……しちゃった」

とはいえ、甘い言葉もキスも、全部ニセモノだ。だから今、こうして胸が痛くなっているのは、私だけ。

持て余す気持ちをごこへやっていいかわからないまま、私も与えられた部屋へ入った。

神谷くんと再会して三日後。

「今日からきてもらうことになった、伊吹寧々さんです」  
「よろしく願います」

彼は約束通り、私に仕事を紹介してくれた。それも念願の音楽教室の事務だ。神谷グループは音楽ホールや劇場、音楽教室や楽器店も経営しているらしい。その部門を彼が取りまとめているそうで、ちょうど募集があったとのことだ。

音楽教室は楽器店とドア一枚で繋がっており、楽器店の店長は音楽教室長も兼ねている。職場は虎ノ門駅から徒歩十分ほどのビルの中にあつた。

シフト制勤務のため、月曜の定休日以外にランダムで休日が入る。

あれから結局、ホテルに二泊させてもらった。

初めて泊まった翌朝、私起きると神谷くんは既に出勤していた。テーブルの上には「困ったら使つて」というメモと一緒に十万円が置いてあつた。気遣いを嬉しく思う反面、彼の金銭感覚に戸惑いを隠せない。

その日の午前中に警察から連絡が入り、私は無事にバッグを取り戻した。奇跡的にお給料がそのまま残っていたので、神谷くんが置いていったお金には一切手をつけずに済んだ。

夜、ホテルに顔を出した神谷くんにそのままお金を返した。洋服代やバッグ代も一緒に払おうとしたけれど、やはり受け取ってはもらえない。

アパートの部屋は修繕に三週間も要することがわかり、私は早々に部屋を解約した。その日うちに仏壇と少しの衣類、家電の一部、そして押し入れの上段に入っていたバッグやアルバム、本と

書類、トランペットを持ち出す。それらの少ない荷物は、まとめて管理会社に一時的に預け、水浸しで使えなくなったものは処分をお願いした。

そして私は、必要なものだけをボストンバッグに詰めて、ホテルから新しい職場に出勤したのだ。「伊吹さん、今夜あなたの歓迎会をしたいんだけど、予定はどう？」

同じ事務職の佐々木さんが明るく声をかけてくれる。私より少し年上ぐらいだろうか。他の女性陣も私と同年代の人が多そうな、落ち着いた雰囲気職場だった。

「ありがとうございます。でも今日は用があまりまして、すみません」

「じゃあ都合のいい日を明日にでも教えてね」

「はい！」

優しい笑顔の佐々木さんに明るく返事をする。せつかく誘ってもらえたのに残念だけど仕方がない。今日は退社後の予定を空けておこう、神谷くんに言われていた。私が住む物件を紹介してくれるらしい。

定時に上がっていいと上司に言われ、五時すぎに職場を出る。楽器店を出たすぐの歩道で立ち止まり、神谷くんに連絡を入れようとしたときだった。

「伊吹寧々さん、ですね？」

名前を呼ばれてどきりとする。振り向くと黒いスーツ姿の男性がこちらを見ていた。三十代後半くらいの、長身で銀縁眼鏡をかけた神経質そうな人だ。……知り合いではない。

「どちら様、ですか」

「私は神谷の秘書をしており、吉川と申します。神谷からあなたの携帯電話へ連絡が入っているかと思うのですが」

差し出された名刺を受け取り、私は急いでスマホの画面を見た。

『僕の秘書の吉川が君を迎えに行く。信頼できる人物だから安心して。彼の画像も貼っておくよ。吉川が君の部屋に案内するから、車で一緒に向かってくれ』

貼りつけられた画像と目の前にいる男性の顔を見比べる。……うん、本人です。

「確認してただけでしようか」

「え、ええ。吉川さんですね」

「どうぞよろしくお願いたします。これから、神谷が用意した賃貸マンションのお部屋へ案内いたしますので」

「よろしくお願いたします」

この辺りだと、私が払える家賃の物件はなさそうだ。かなり離れた場所まで移動するんだろう。

「では、あちらの車へどうぞ」

すぐ近くに大きな黒塗りの外車が停まっていた。白い手袋をした運転手と思われる男性がこちらへお辞儀をし、後部座席のドアを開ける。まさかあれに乗れと？

怯みながらも、吉川さんに促されるままに車へ乗り込んだ。車内はふわりと爽やかな香りがする。助手席に吉川さんが座ると、運転手がこちらを振り向いた。

「お疲れ様でございました。少々渋滞しておりますが、十分ほどでご到着の予定です」

「はい。ありがとうございます」

返事をしてから、気づく。ここから十分ほどの場所ということは、都心も都心だ。どんなに古い物件でも前のアパートよりは、かなり家賃が高いはず。これは無理かもしれない。

紹介される物件を半ば諦めた私は、今夜はビジネスホテルに泊まって、住むところは自分で探すかと覚悟を決めた。

それにしても何なの、この後部座席の広さは。足をまっすぐ伸ばしてもまだ余裕がある。足元はリクライニングつきで座席の横幅もあるし、普通にこのまま寝られそう。運転席と助手席、それぞれの背面にあるタブレット型の液晶画面は、どうやらテレビやネットが見られるようだ。

慣れない車内できよろきよろしている間に、車は夕方の渋滞した道路を進んでいく。道路際の電柱に「麻布台」と住所が表記されていた。

そのまま六本木方面へしばらく進む。ひと際美しい高層ホテルが現れた。ぼんやり眺めていると、車はそこへ入っていった。

「ご到着です」

「え？ こ、ここ……!?!」

こっつて高級ホテルじゃないの!?

「お帰りなさいませ」

制服を着たドアマンが、車を降りた私たちにお辞儀をする。

「先ほどフロントデスクへ連絡を入れておいた、神谷の秘書の吉川です。こちらが伊吹様です」

「コンシェルジュより伺つております。お待ちしております、伊吹様」  
「えっ、あ、はいっ」

急にこちらに挨拶をされて、突拍子もない声を出してしまった。

「三十分ほどしたら、また出庫しますので」

「承ります。キーをお預かりいたします。運転手様はこちらへ」

ドアマンが車を移動させるようだ。

私は吉川さんのあとについてホテル、もといマンションのエントランスに入った。

「あちらがフロントデスクです。二十四時間、常時コンシェルジュがおりますので、お困りのことがありましたらフロントへ。ではエレベーターに乗りましょう」

歩きながら吉川さんの説明を聞く。

どう見てもホテルのレセプションにしか見えない。コンシェルジュの女性が優しく微笑み、遠くからこちらへ会釈をした。引きつる笑顔で会釈を返す。戸惑う私をよそに、早足で進む吉川さんの靴音が吹き抜けのエントランス中に響いた。急ぎ足で追いかけて、その背中に問いかける。

「吉川さん、ちょっと待ってください。ここはホテルじゃないんですね？」

「ええ。賃貸マンションですが」

「まさかと思いますが、ここに私が住むんですか？ 困ります、こんなとんでもないところ」

高級感あふれる木目調の巨大なドアの前にたどり着くと、吉川さんが振り向いた。

「お気に召されませんでしたか。では専務にお伝えして、別の場所をご用意させていただきます」

「いえ、お気に召さないとかそういう問題じゃなくて、もっと狭いところをお願いします。こういうところは立派すぎて気が引けますし、まず私には家賃が払えませんので」

1Kの木造アパートが精いっぱい私には、いくらなんでもハードル高すぎでしょ。

スーツのポケットからカードを取り出した吉川さんは、ドア横の平べったいボタンのようなものにそれをかざした。その瞬間、ボタンが青く光る。

「何も聞いていらっしやらないのですか？」

眼鏡の真ん中を押さえた彼は、ひとつため息を吐いた。

「何も、とは？」

「神谷専務が全て負担しますので、あなたがそのような心配をされなくてもよろしいですよ」

「なっ、それはさすがに困ります！ 場所を紹介してもらおう約束はしましたけど、でも」

「それでは逆に私が困ってしまいます。準備は整っておりますし、まずは一旦お部屋に参りましょう。それからあとのことは専務と直接お話しください。エレベーターがきましたよ」

ドアがひらいた。この巨大なドアはエレベーターだったのね。もしやカードで呼び出す仕様？

それにしても神谷くんといい、この人といい……さらっと自分のペースに巻き込んでいくのがうますぎる。拒否するどころか、そんな隙さえも与えてくれないんだから。

乗り込んだエレベーターが十八階で止まった。……十八階!?

「申し訳ございません。専務はもっと上階を希望していたのですが、空きが出なかったもので」

吉川さんが頭を下げる。



「いいえ、十分、十分です！」

まだ住むと決まったわけではないのに、おかしな返答をしてしまった。

本当に人が住んでいるのだろうかと疑うほど静かな廊下を、おっかなびつくり進んでいく。絨毯が敷き詰められていて本当にホテルのようだ。エレベーターとお揃いの木目調のドアの前で、吉川さんがさっきのカードを使い、ロックを解除した。

「おひとりですので、ワンベッドルームとなります」

「お邪魔、します」

玄関の立派さにドキドキする。廊下を進んだ正面のドアを吉川さんが開けた。

「わ、あ！ 広——い!!」

二十畳はあるだろうリビングが現れた。大きなベアガラスの窓から、素晴らしい景色が目飛び込む。都心のビル群が間近に見え、ホテルの窓際で神谷くんとキスしたことを思い出した。思わず顔が熱くなる。私は頭をぶんと横に振り、キッチンへ視線を移した。

リビングダイニングに繋がる、すっきりとしたアイランドキッチン。白くペイントされた木製のダイニングテーブルと、お揃いの椅子が二脚ある。リビングの中心を大きなソファが陣取っていた。その上に、外国製と思われる可愛らしいシャンデリアがぶら下がっている。間接照明があちこちで部屋を柔らかく照らしていた。

キッチンの棚の前に立った吉川さんが、淡々と説明を始める。

「こちらに食器は揃っております。家電は全て使えるようにしておきました。説明書がございます

のでお読みください。食料品、飲料類は私が先ほど調達して参りました」

「あ、ありがとうございます」

「寝具やタオル、少しですが衣類などは専務が選びました」

「神谷くんが？」

「あなたの肌に直接触れるものは、専務ご自身で選びたいのだそうです」

意味深な言葉を受けて心臓が音を立てる。神谷くんのその言動は、私に好意を向けているようにしか思えない。けれど、私たちはそういう関係ではないのだから、落ち着かなくては。

私が彼の恋人だと信じさせるために、神谷くんはわざとそういう言い方をしたのだろうか。吉川さんはこの偽装恋人の件を知らないのか？ あとで神谷くんにしっかりと確認しておこう。

リビングの横は、フレンチテイスト満載のロマンティックな寝室になっている。リビングのものよりも華奢で小ぶりのシャンデリアが下がっていた。生成りに淡いラベンダー色とくすんだピンク色の花柄がプリントされた寝具は、大人っぽい可愛らしさがある。ベッドサイドのチェストはクリムム色で、取っ手はガラス製のアンティークのようだった。お揃いのドレッサーまである。

壁一面のクローゼットをひらくと、ほわんとよい香りが漂った。職場に着ていけそうな洋服が一週間分以上かかっている。加えて、ワンピースが数枚と、どこへ着ていくのかわからないパーティー用のドレスが数枚。ショールや帽子、ブランド物の靴やバッグ、なぜか水着まで揃っている。

「お部屋のクリーニングは全て済んでおります」

「いつの間に、こんな用意を？」

「……急がせましたので」

お部屋のクリーニングや衣類は別として、いくら急がせたといっても家具や食器や家電が、たったの三日で揃うのは早すぎないだろうか。まるで、私がここへ入ると決まる前から準備されていたかのように、手際がいい。

「一階にジムやジャグジーのあるフィットネスセンターがございます。クリーニングや宅配便はフロントデスクへお出しください。隣接するホテルのレストランからの出張料理、ルームサービスもご利用可能ですので、こちらのパネルからコンシェルジュにお申しつけを。十五階のバーラウンジとカフェのご利用はお時間にお気をつけてください。その他のサービスの内容はここに書いてあります。玄関はオートロックで、さきほどのカードキーをかざせば開きます。エレベーターも——」

な、何を言っているのかわからない。

「それと、こちらがお部屋の住所です。賃貸契約書は専務がお持ちです。住所変更などの手続きはご自分でなさってください。予備のカードキーはこの封筒に入っております」

ここに？ 私が？ 住むの？ 本当に？

「明朝、ご出勤時にお車を手配いたします。何時頃がよろしいでしょうか」

「車!? い、いえ電車で行きますので大丈夫です」

「かしこまりました。それでは私はこれで、失礼いたします」

「吉川さん。あの、本当に本当に、私がここに住むのでしょうか？」

「のちほど専務がこちらへ参ります。そのときにご相談ください。二十二時頃になると思われます

が、いかがでしょうか」

神谷くんに直接言おう。こんな豪華なところには住めないって。

「ええ、大丈夫です。お待ちしていますと伝えてください」

神谷くんを待つ間、することがないので、家電の取り扱いやお風呂の入れ方等の説明書を読んでいた。吉川さんが買っておいしてくれた有名店のカツサンドを部屋を汚さないよう気をつけながら食べる。

かなり時間が経ったあと、柔らかな音が室内に鳴り響いた。何の音かと慌てて立ち上がる。周囲を確認すると、リビングの壁に設置されたタッチパネルが光っていた。画面に神谷くんが映っている。

「は、はい！」

「こんばんは。お邪魔してもいいかな」

彼の声に胸がきゅんとなる。何なの、このドキドキは。

「はい、どうぞ。今開けます」

説明書を読んでおいてよかった。そう戸惑わず、ロックを解除できる。

ほどなくして玄関のインターホンが鳴った。彼だと確認してから玄関へ急ぎ、ドアを開ける。

「こんばんは」

ネイビーのスーツを着た彼の笑顔に、またもや心臓が反応した。

冷静にならないとダメ。とにかく部屋についてしつかり話し合わなくては。